

て来ました。

主人は自分の娘も他人の世話になっているのではと、自分が食べるものも食わずに連れて歩いたと言うんです。後日娘さんから「ハルピン駅で泣いていた、私を連れて来てくれたおじさんのお陰で残留孤児にならなくてすんだ。父親は、ひと目お会いしてお礼をしたいと何時も気にしていた。

ホテルから帰って、母親と仏前で恩人と再会できたと報告しました。母親が元気になったら山形を訪問したい。」と手紙がきました。

あの天地動転のような地獄さながらの混乱の中で主人が人助けをする心の餘裕があったと知りうれしかった。

私の歩んだ軍隊生活と戦後

福島県 植田 三郎

昭和十年現役兵として、朝鮮羅南山砲二五連隊に入営した。昭和十三年三月に満期除隊後、ソ満国境の張鼓峯

で日ソ交戦と言うニュース発表後間もなく、臨時召集で仙台野砲二連隊に入って、同日夕方仙台駅を出発した。常磐線経由で出発羅南の元隊に戻った時、すでに停戦協定になっていた。山砲中隊は、出動して十八人が名譽の戦死、私共召集は予備として三か月程で召集解除となった。現地で除隊する者は会社、工場などに就職する者が多かった。私も昭和十三年十月頃、満州国敦化第八野戦航空修理庁に軍属として就職した。各地にも出向した。昭和十六年の春、一時帰国し、郷里で結婚式を挙げ牡丹江省梅林に到着した。戸数三百戸程の満人部落であった。飛行場と三戸程の官舎があり、そこに居住した。満州の春はかけ足でやって来て、野や山に名も知らぬ草花が咲き乱れ、平凡ながら平和な生活だった。昭和十七年長男が誕生した。

昭和十八年には、本庁の蘭崗に転属になり毎日が忙しく残業が続いた。そんな頃、父の危篤の電報が来て、上司の許可を得た。父の好物の甘い物を酒保から一か月分の配給を受けて、朝鮮経由で帰国の途についた。各駅からは、窓から出入りするような命がけの旅だった。父親と

面会して、全快を祈りながら無事帰る事が出来た。昭和二十年三月頃八野戦航空修理庁北支方面転進と言う命令が出て、三日間のうちに荷物を発送して家族は同時帰国する事になった。朝鮮羅津港經由新潟港上陸三歳と一歳の子供を連れた妻は無事帰国した。蘭岡より出した引越荷物木箱十六個内容明細書付き運賃百七十五円十銭だった。現在もこの書類がポロポロになっているが手許にある。その木箱の荷物は、日本海に沈んだのか妻の許に届かず、家族三人は、結局丸裸のまま、これからが苦勞の始まりとなった。

私共の部隊は昭和二十年の五月濟南駅に到着、大きな市街で貨物庁や兵器庁など、重要な軍事基地だった。急造した兵舎に居住した。この頃から定期便の如く、米軍機が来襲する毎日だった。敗戦の八月十五日、ソ連軍は牡丹江市街へ、そして全滅した。各地の開拓団員も銃殺されているとの情報を得た。衛兵所も国軍に変わり、街の治安も悪く一步も外に出る事が出来なかった。

私共軍属にも引き揚げ命令が出て、約五百人が三八式歩兵銃、手留弾などで武装し、無蓋車にて濟南駅を出発

三十分も走ったかと思われる頃、急停車した。八路軍が鉄道破壊をしたとのことだった。枕木は一本もなく、北支の十二月は肌をさす寒気だった。徒歩にて青島まで南下することになった。三十キロもあるリックを背負い、その夜は学校の軒下で野宿することになった。三日分のにぎり飯と、蒸し大豆とを持ち、野を越え、川を渡り、野宿しながら歩いた。道端では、いたる所に死体がころがり、疲勞と寒さで虫の息で助けを求め大勢の人々。これらの人々にどうする事もできず、ただ合掌するのみだった。

濟南を出て十日、眼下に大きな市街が見えた時の感激は、今は遠い思い出になってしまった。

兵器類を供出して、身体検査、時計、万年筆などは没収された。そして、頭からDDTをふりかけられた。四日間の收容所生活だった。三度の食事はこうりゃんがゆの連続だった。敗戦とは情けないものだと思った。多くの人が殺され、石を投げつけられ、こじきのような姿になってしまった。

引き揚げの為乗船を待つ人々のあわれな様子は、今も

まぶたに焼きついている。

私も満州に渡って七年、金千円也をもらって、舞鶴港に上陸、その日は昭和二十一年一月一日午後五時頃だった。町並みは、暗く、重いリックを背負い、家族の待つ実家に帰った。無事帰宅できた。長い間、家族がお世話になったので、よくお礼を述べ、今は亡き父にも、報告した。

いよいよ、財産を失った丸裸の生活がやってきたのだ。当時の食生活は想像以上のひどいものだった、七人家族の生活が始まった。休む暇もなく職探しの毎日だった。ある友人に誘われ、宮城県石巻に魚の買い出しについていった。

仙台駅で朝一番の電車に乗った。当時は統制配給の時代で、道路の両側には闇市場が開かれていた。魚の豊富さには驚かされた。月に六、七回は出かけた。差し引きで三千円位もうかった。しかし、取り締まりが強化され、没収される回数が多くなり、闇屋をやめてしまった。ちょうど手頃な家があった。玄関つき六畳二間で六千円で買い求めた。家族も三男一女となり、長男は東京の親

戚のパン製造工場に就職した。いつのまにか、世の中が安定に向い、いろいろな物資が出回ってきた。私も青果仲買業を始め、農業からジャガイモ、枝豆、蜂矢柿などを買いつけ、出荷するような仕事をした。

全国的にも野菜の産地であり、枝豆などは毎日三千貫も出荷し、一部は冷凍工場に回した。何年か経つうちに、量より質の時代になり、青果物等の取り引きも変わり、荷受機関として大きな市場も出来た。

手頃な土地を百坪買い求め、その年の十一月新居に引っ越す事ができた。とてもありがたい事と思っている。

私の戦前・戦中・戦後

福島県 石川 佐 中

海外居住の動機と職務

昭和十九年八月十一日私は、勤務中の宮城県塩釜市の塩釜神社から、旅順市に創建される関東神宮職員として赴任するため、妻同伴の出張を命じられた、かねて海外